

通常の学級に在籍する中学2年生の場面緘黙症の生徒に対して、メモやアプリを用いた意思疎通に取り組んだ事例

1. 事例の概要

本事例は、場面緘黙症である通常の学級に在籍する中学2年生のA生徒に対し、学級担任と教科担任、特別支援教育支援員（以下、「支援員」という。）等による協力体制に基づき指導を行った事例である。A生徒は場面緘黙症のため、学校では一切声を出さない。また、指示を聞き、皆と行動することが難しい。そのため入学当初はA生徒の考えを把握することや、指示に従い集団行動をすることが困難であった。

A生徒の考えを理解するための方策としては、まずは支援員がA生徒の考えを引き出すため、メモでのやり取りを行い、次第により複雑な考えを引き出すためにタブレット型端末のアプリの使用も始めた。また、学級担任が放課後、A生徒と二人でコミュニケーションをとる場面を設定し支援を行った。これらのA生徒とコミュニケーションを取るための取組により、学級担任や教科担任、他の生徒に対する緊張感がほぐれ、A生徒は少しずつ自分の意志表示ができるようになってきている。時には声を出して笑う場面も見られるようになってきている。他の生徒も支援員や学級担任の行動をモデルとして、同じ方法でA生徒とコミュニケーションを取るようになってきている。今後もさまざまな方法を試して、A生徒の意思を少しでも汲み取れるような方策を考えられるよう取り組む必要がある。

キーワード 場面緘黙症、緊張、コミュニケーション、メモによる意思疎通、アプリを用いた意思疎通

2. 児童の実態

A生徒は場面緘黙症のため、学校生活において一切発言しない。笑い声などの声を出すこともほとんどない。学校以外の日常生活では、母親や兄弟などの家族とは会話をしているが、その他の人は一切会話をしていないこともあり、休日に一緒に遊ぶような友達はいない。

授業中は他の生徒の発言を聞くのみで、自分の気持ちを表すことが全くなかった。また、書くことも苦手としており、授業や行事を終えての感想・反省などの文章は全く書けず、黒板に書いてあることをノートに書き写すこともできなかった。簡単な単語を記入するようなワークシートをまとめる際にも、支援員の支援を必要とする場面があった。また、毎日担任に提出している連絡ノートは、ほぼ、同じ内容の文章の繰り返しであった。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- 校内で特別支援教育部会を隔週開催し、必要に応じて大学教員の指導を受け、具体的取組について内容を確認・検討し、評価している。そして、各学年の特別支援教育担当者が各学年会へ周知し、具体的な実践に移している。【基礎2】
- 生徒への巡回指導などの観点から、合理的配慮協力員と支援員を配置している。

また、週1回スクールカウンセラーが来校し、カウンセリング及びアドバイスを実施している。【基礎6】

- 支援員や合理的配慮協力員が、必要に応じて学級に入り、つまずきや困難のある生徒に個別の配慮をしている。【基礎7】

4. 合意形成のプロセス

入学当初より、教師や他の生徒との意思疎通に困難さを感じられたA生徒だが、特に初めての場面や初対面の人と関わる時には、緊張感が増し、動きが止まってしまうこともあり、入学当初は、特別教室に時間通りに行けず、遅れて教室に入ったり、授業のある教室にたどり着けず廊下に黙って立っていたりしたときもあった。その時に、声かけを中心に関わりを続けたのが、支援員であり、以降、A生徒と支援員の信頼関係が少しずつ深まっていった。この支援員との信頼関係を基盤として、A生徒はメモによる意思疎通を開始し、やがて、両手を用いての「Yes」「No」の選択や、頷きでの意思疎通を重ねている。このようなA生徒の様子を保護者に細かく伝え、次の手立てを提案することを繰り返すことで、保護者と合意形成を図り、支援を進めている。

5. 合理的配慮の実際

- A生徒の考えを引き出すためにメモでのやり取りを行っている。メモは、質問に対する答えを複数書き出し、○印で選択するものである。また、より複雑な考えを引き出すためにタブレット端末のアプリの使用も始めている。【合理①-2-1】
- 連絡ノートに一日の振り返りを記入してもらうようにしている。A生徒は悩みや相談などを記入することもあり、担任がA生徒の心理状態や健康状態を把握している。また、必要に応じて放課後に面談を行い、担任と学習面や生活面での悩みがないかメモによるやりとりやタブレット型端末のアプリを用いて意思疎通を図っている。【合理①-2-3】
- スクールカウンセラーや、大学教員のアドバイザーからの助言をもとに、ケース会議を開催し、個別に対応する際のプログラムを作成している。【合理②-1】

6. 本事例の成果と課題

学級担任や、支援員だけでなく、各教科担任がA生徒に対する理解を深め、各教科に応じた支援をしている。そのため、授業中の緊張度が下がり、他の生徒と同じく活動できるようになってきている。

A生徒の課題の一つである、自分の考えを文章で表現することについては、タブレット型端末のアプリを使用し、自分の感情を記号で表すところから始めている。記号を選ぶだけでどんな気持ちなのかを表すことができるもので、A生徒が慣れた段階で文字入力をして、短い文章で気持ちを表すことができるようすることを考えている。現在、A生徒と行っている意思疎通の方法は、相手がA生徒の思いを予想することが必要で、反応を見ながら質問を変える必要がある。そのため、A生徒にとっても、周囲の人にとってももどかしい場面もある。今後もさまざまな方法を試して、A生徒の意思を少しでも汲み取れるような方策を考えられるよう取り組む必要がある。